

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02329

研究課題名（和文）シカゴ派プラグマティズムの実演の思想と想像力概念の機能に関する教育哲学的考察

研究課題名（英文）Considering the Thought of Demonstration and the Concept of Imagination in Chicago Pragmatism from the Viewpoint of Educational Philosophy

研究代表者

古屋 恵太（FURUYA, Keita）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：50361738

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、まず、シカゴ・プラグマティズムを代表するジェーン・アダムズが設立したハルハウスの思想と実践の特徴を抽出した。その結果として、シカゴ・プラグマティズムが実演をその哲学の核とするという仮説が立てられた。そこで、アダムズ、ジョン・デューイ、ジョージ・ハーバート・ミードの「劇化」や「遊び」の思想を考察することで、その仮説を検証した。アダムズの「労働博物館」とデューイの「実験学校」は人類の問題解決を大人や子どもが創造的に再現することを目指していた。また、共通した社会的対象に関わる協働が成立する原理を示したものが、ミードの「他者の態度取得」の考えであることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シカゴ・プラグマティズムは「劇化」や「遊び」の思想に基づく実演の哲学であるという本研究の発見は、目の前の子どもの自然を尊重する子ども中心主義とも、現在の社会に近い空間に学校を変え、実社会の活動を提示することによる動機づけを行う社会（適応）中心主義とも、シカゴ・プラグマティズムの教育思想が異なっていることを示している。シカゴ・プラグマティズムの哲学は、教育を人類がこれまで行ってきた問題解決の「劇化」ととらえ、「遊び」を「仕事」とともに人類の「原初的作業」と主張する。それは、人類史と人類史における思考の自然史を実体験するものとして学校教育を再構成する立場を提供してくれる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the distinctive philosophy applied at the social settlement house known as Hull House, founded by J. Addams, one of the Chicago Pragmatists. By focusing on Hull House, this study confirms the hypothesis that the main concept of Chicago Pragmatism involves utilizing imagination through the demonstration of essential ways of living which societies throughout history have experienced. The study also compared the thoughts and practices of other Chicago Pragmatists, namely J. Dewey and G. H. Mead. At the Labor Museum in Hull House, adult immigrants shared cultural knowledge by demonstrating their traditional spinning and weaving techniques. Alternatively, in Dewey School, children were engaged in problem-solving activities using dramatic play which mirrored challenges their ancestors had faced. The study established that Mead's concept of "taking the attitude of the other" is the cooperation principle which is essential for individuals within a community.

研究分野：教育哲学

キーワード：ジョン・デューイ シカゴ・プラグマティズム 実演 想像力 劇化 遊び ジョージ・ハーバート・ミード ジェーン・アダムズ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ジェーン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) が設立したソーシャル・セツルメント・ハウスであるハルハウスをシカゴ・プラグマティズムの中心地とすることで、シカゴ・プラグマティズムの思想の分析を推し進める。その背景にあるのは次のことである。

(1) 一般的にシカゴ・プラグマティズムの一団に属する思想家だと見なされてきたのは、シカゴ大学の研究者たちであった。このため、シカゴ・プラグマティズムを研究する際の焦点は大学にあった。しかし、これまでの研究でも、実際には大学よりも広い空間的視野と歴史的立場のもとでシカゴ・プラグマティズムをとらえるべきだと主張されてきた。なぜならば、1890年のシカゴ大学創設前から、教育、ソーシャル・ワーク、博愛的活動に関する新たな運動と思想がシカゴでは起こっていたからである (Rucker 1969)。産業化・都市化、移民の大量流入によって社会秩序の再編が求められ、革新主義期を迎えたアメリカを象徴する都市がシカゴであり、シカゴ・プラグマティズムが登場する舞台であった。このため、シカゴでの社会改革運動とそれを支える思想と不可分のものとしてシカゴ・プラグマティズムは位置づけられる (Feffer 1993)。このことは、学校改革ばかりでなく、当時のシカゴが抱えていた労働問題や少年問題への取り組み、そして、それに取り組んだ中心地をシカゴ・プラグマティズム研究の射程に入れることを要求することになる。そうだとすれば、1889年にアダムズがエレン・ゲイツ・スター (Ellen Gates Star, 1859-1940) とともに設立したハルハウスを、シカゴ大学に並ぶその中心地として位置づけた研究が必須となる。

(2) 1980年代以降のフェミニスト・プラグマティズム研究も、この立場を後押ししている。シャーリーン・ハドック・シーグフリード (Charlene Haddock Seigfried) は、忘れ去られたフェミニスト・プラグマティストたち、アダムズはもちろん、シカゴ大学教授、シカゴ市の教育長、さらには全米教育協会の会長をも務めたエラ・フラッグ・ヤング (Ella Flagg Young, 1845-1918)、ルーシー・スプリング・ミッチェル (Lucy Sprague Mitchell, 1878-1967)、エルシー・リプリー・クラップ (Elsie Ripley Clapp, 1879-1965) らのプラグマティズムに対する貢献を次々に掘り起こした (Seigfried 1996)。また、メアリー・ジョー・ディーガン (Mary Jo Deegan) は、社会学のシカゴ学派を構成した男性研究者たちにアダムズが与えた影響や、アダムズとシカゴ・プラグマティストであるジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952)、ジョージ・ハーバート・ミード (1863-1931) との思想的交流を描き出している (Deegan 1990, 1996, 1999)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教育哲学という学問領域の特性を活かして、アメリカ哲学を代表するプラグマティズムのうち、プラグマティズムのシカゴ学派、すなわち、シカゴ・プラグマティズムの思想を再検討することである。該当する思想家の名前を挙げながら具体的に言い換えるとすれば、シカゴ・プラグマティズムの思想的系譜を、アダムズ、デューイ、ミードから、ネヴァ・レオナ・ボイド (Neva Leona Boyd, 1876-1963) を経て、ヴァイオラ・スポーリン (Viola Spolin, 1906-1994) へといたる道として描くことである。つまり、アダムズをシカゴ・プラグマティストに加え、ボイドとスポーリンを、シカゴ・プラグマティズムを受け継いだ思想家の系譜に加える試みである。

純粋な哲学研究、思想史研究とは異なる教育哲学の観点からの思想史研究として、本研究が独自に検討することとしては、「ゲーム」(game)を含む「遊び」(play)と「劇化」(dramatization) という二つの観点からそれを行うということがある。「遊び」という観点は、ディーガンがすでにアダムズ、デューイ、ミードをとらえる観点として提供してくれていたものである。本研究はこの「遊び」を「演じること」とも理解することで、「遊び」と「劇化」概念が、シカゴ・プラグマティズムとその後のその思想的系譜を貫く重要な柱となることを仮説として研究を進める。その根拠は、アダムズもデューイも、教育は過去から現在にいたる人類の問題解決を実演することだと理解し、その営みを「劇化」という言葉で表現していたこと (Addam 1909, Dewey 1916)。また、ミードも「他者の役割取得」(taking the role of the other) ないし「他者の態度取得」(taking the attitude of the other) という独自の表現に見るように、演劇的なメタファーを用いて社会的存在としての人間とその精神、自己の発生を論じていたこと (Mead 1925) である。また、想像力も現実から遊離した能力ではなく、「劇化」としての教育の過程で働く機能として定義されていた。この仮説を誘導体とすることで炙り出されてくるのが、ディーガンが言及してはいるものの、研究対象とはしていないハルハウスの活動家、「遊び」の理論家・実践家であるボイドであり、さらには1924年から1926年にかけてハルハウスでボイドに教えを受け、インプロトと「シアター・ゲーム」に基づく教育家として後に知られることになるスポーリンへといたる道筋である。言い換えれば、「遊び」と「劇化」を、アダムズ、デューイ、ミード、ボイド、スポーリンを貫く教育の中心概念と捉え、その観点からシカゴ・プラグマティズムの思想を教育思想として描き直すのが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

シカゴ・プラグマティストが活躍した 19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカを対象とする本研究は、当時のアメリカの社会状況、思想動向を視野に入れる必要がある。従って、本研究の学問的方法としては思想史研究の方法が用いられる。最初に、従来行われてきたような、アダムズとデューイ、ミードら大学の研究者との関係を個人的なものとして描き出すことに加えて、デューイとミードがアダムズのハルハウス、ソーシャル・セツルメントの活動をどのように理解していたかを考察する。それによって、デューイとミードは社会改革の志という政治的態度に関してアダムズに共鳴していたばかりでなく、ハルハウスで展開された教育とそれを支える思想そのものに積極的な可能性を見だし、自ら参加主体となっていたことが明らかとなる。例えば、デューイにとってハルハウスは、日常的には衣食住という生命維持に不可欠な活動を、なすことを通して学ぶ場であり、「ソーシャル・センターとしての学校」であった (Dewey [1902]1976)。また、ミードにとってそれは「家庭のようなコミュニティ」であり、共感性を育む「隣人性」(neighborliness) を持つ場であった (Mead [undated: a]1999)。以上のように、ハルハウスの実践と思想との関わりから、アダムズ、デューイ、ミード、さらにはボイドの思想を考察することとした。具体的に行った個々の研究の方法については次の通りである。

(1) アダムズのハルハウスに開設された幼稚園に焦点を合わせ、そこから導き出される思想史的背景に基づいて、デューイの「遊び」論、「遊び」(play) 仕事 (work) 論を再検討する。思想史的背景とは、ハルハウスでも、デューイの「実験学校」でも、フレーベル主義の教師が教育を担当していたことである。ここから、フレーベル主義とデューイ教育思想の関係を再検討することとした。

(2) アダムズのハルハウスに付設された「労働博物館」(Labor Museum) の創設にデューイが関わっていたという事実に基づいて、「労働博物館」とデューイの「実験学校」の思想的共通性を「劇化」(dramatization) という観点から分析する。それは、後のデューイの美的経験論を再解釈する観点を与えてくれることも期待された。

(3) ミードの「遊び」論は「プレイ」と「ゲーム」の二段階の社会化説として知られる。しかし、アダムズ、デューイの思想と実践への協力者としてミードが位置づくことから、ミードの「遊び」論を従来の社会学研究の観点からではなく、アダムズ、デューイとの共通性を強く有する時期とミード個人の独自性が発揮される時期に特徴を分けて考察する。

(4) 「ハルハウス・スクール」として知られている「シカゴ・レクリエーション・トレーニング・スクール」(Recreational Training School of Chicago) で、子どもを遊び場で指導する人のために、また、公共の福祉としての遊びの普及のために教えた人物として、ボイドとその思想を考察する。日本の教育学では全く知られていないボイドは、即興演劇で有名なスポーリンの師である。ボイドとシカゴ・プラグマティズムとの思想的関係を検討することによって、「遊び」や「劇化」の意義がスポーリンへと時代を経て変容する過程を捉えることも可能となる。

4. 研究成果

研究の成果として明らかになったことを、以下、上記四点に対応する形で四つに分けて論じる。

(1) シカゴ幼稚園教員養成所は 1898 年にハルハウスに移され、デューイの「実験学校」に協力する進歩派フレーベル主義者、アンナ・ブライアン (Anna Bryan, 1858-1901) を輩出した。そのブライアンの教え子であるジョージア・プライス・スケーツ (Georgia Price Scates) は「実験学校」の教師となった。この一例に限らず、アダムズ、デューイ、フレーベル主義は密接な関係にあったことを示した。一般的にフレーベル主義は、デューイを代表とする進歩主義から批判され衰退したとされる。そのことは完全な間違いではないが、その議論によって、デューイを進歩主義と同一視すること、また、デューイとフレーベル主義の断絶ばかりを強調することは思想史的に見て正しいとは言えないことを、デューイ教育思想の核である occupation がフレーベルに由来すること、その occupation に特別な重要性を与えることが進歩主義を代表するデューイの弟子、ウィリアム・ハード・キルパトリック (William Heard Kilpatrick, 1871-1965) には見られないことを示すことで明らかにした。

近年の研究でも、「実験学校」でフレーベル主義の教師がフレーベルの考案した恩物と呼ばれる遊具を使用したことが明らかにされている。ただし、その趣旨はフレーベルとは異なり、進歩主義が説く子どもの日常的な社会生活を再現する教育の道具として恩物が使用されたと述べることにあった。しかし、現実の教育実践の多様さや複雑さを示したものもある (Prochner and Kirova 2017)。それに従い思想史を再検討すれば、未開から野蛮、野蛮から文明へという社会進化の思想圏で、過去の人類の問題解決を体験させるために「原初的作業」というべき occupation を教育の核としたのがデューイであったことを確認できる。それは「遊び」と「仕事」を連続的な教育の過程と捉えて手仕事、手作業を重視したフレーベルの思想と矛盾しないどころかむしろ共通している。以上から、デューイはフレーベル思想を継承して、「遊び」と「仕

事」をともに occupation とする教育へと発展させたと考えられることを明らかにした。

(2) 「実験学校」での実践とそれを支える思想を説明した『学校と社会』(*The School and Society*)でデューイは、教育における「劇化」を限定した意味で使用している。デューイは子どもの成長段階のうち、4歳から8歳までの第一段階を劇的同一化の時期とした(Dewey 1899)。それは人類の初期の原初的な暮らしを、物語をときに媒介としながら想像し、その環境を描いたり工作したりして、その環境を劇の形で生きてみることであった。しかし、確かに「劇化」は特定の年齢の子どもの教育のための手法の一つではあるが、教育的経験を構成する要因として、それを美的側面から説明する概念としても使用されていた。その例証を、人類の問題解決を体験する教育を「劇化」と呼ぶ文章として、『民主主義と教育』(*Democracy and Education*)に見た。アダムズの「労働博物館」で行われた実践はこれを裏付けるものであった。この博物館は製陶部門、織物部門等での実践を資料によって明らかにすればわかるように、実演を展示する博物館であったからである。移民たちは自らの出身地で行われていた製陶や織物を実演して見せ、年少者はそれに参加し、見学者はある種の見世物としてそれを体験することができた。アダムズもまた、こうした教育作用を「劇化」という言葉で表現していた。

こうした発見は、『経験としての芸術』(*Art as Experience*)を再解釈する可能性をも示唆するものであった。デューイの芸術論は近代の自律的芸術に限定されたものではなく、人類の問題解決の産物である人工物としての art を論じることから出発しているからである。また、その art を論じる際に、ドニ・ディドロ(Denis Diderot)が論じた俳優のパラドックスという考え方を取り上げ、批判しているからである。デューイは舞台俳優が自分の演じる役に入り込み、その役柄になりきる一方で、その役柄から一定の距離を取っているというパラドックスが前提としている、俳優としての主体を優位とする考えを否定する。そして、俳優は俳優が演じる「主題」(subject matter)の展開の一部を成すこと、その展開に誠実であろうとする過程で観客の反応や態度を考慮するものであることを主張する(Dewey 1934)。以上から、デューイが劇的同一化に加え、アダムズの実演の博物館に見られるような、他者の反応や態度の想像をその芸術論と教育思想において必須の要件としていることを明らかにした。

(3) デューイの実験学校が開校した 1896 年に、ミードは「教育に対する遊びの関係」(“The Relation of Play to Education”)という論文を発表している。この論文は、「労働」(labor)としての現実の「仕事」、それを受け継いでいる学校での勉強を問題視する点で、また、「遊び」に現状を改善する手がかりを見いだす点で、言い換えると、「遊び」が有機体としての子どもに対して環境への自然な「協応」(coördination)を求めると見なし、そうした「遊び」をもとに学校での「仕事」の内容と方法が変更されるべきだと考えている点で、同時代のデューイ(とさらにはそれより前の世代の近代産業社会の批判者たち)と大きな違いはないものである。つまり、初期ミードの「遊び」論は同時代の思想圏内にあった。

これに対して、デューイがシカゴ大学を離れてから 15 年以上経過した、1920 年代以降の後期ミードには、ミードにしかない独自の思想が見られるようになる。それは第一次世界大戦後の国際協調への関心や、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947)の著作からの影響によるものと考えられ、差異のある者同士の「協働」(cooperation)はいかにして可能か、という問いによって言い表すことができる。後期ミードの「遊び」論はこうした社会的、思想的文脈で登場した。「遊び」論のうち、「プレイ」は具体的な他者の態度を取得するものとされる。他方で「ゲーム」はゲームに参加する多様な役割を取得するものとされる。両者の「他者の役割・態度取得」という考え方は従来、社会化論の一種と見なされ、身近な人の態度を取得する段階から、抽象的な役割の取得にいたる過程を示すとされてきた。しかし、ミードは「遊び」を対人的コミュニケーションとして論じたのではなかった。ミードは、共通した「社会的対象」を異なる立場から諸個人が参加する「協働」の核に位置づけ、異なる立場にある諸個人同士が互いの刺激となり、互いに反応しながら、どのように「協働」を実現するかを説明することに「遊び」という現象を適用していた。そして、そのモデルをもとに、人間という種における自己の発生と子どもの発達を論じていた(Mead 1925)。これは、デューイの強い影響から離れながらも、ミードが、デューイが重視しながら十分には展開しなかった「協働」の理論に取り組んだと考えられることを論じた。

(4) アダムズ、デューイ、ミードよりも一回り若い 1876 年の生まれであるボイドは、1909 年からソーシャル・ワーカーとして、後のエックハート公園で「遊び」とレクリエーション活動の指導を行い始めた。1911 年には「遊び場で働く人のためのシカゴ・トレーニング・スクール」(Chicago Training School for Playground Workers)という名の、遊び場の指導者、監督者のための訓練学校で指導を開始した。ここでの「遊び」にはフォーク・アート、フォーク・ダンス、演劇、ゲームが含まれていた。ボイドが「ハルハウス・スクール」と呼ばれた「シカゴ・レクリエーション・トレーニング・スクール」の指導者となるのは、その後のことである。

子どもばかりか大人にとっても遊びが教育上有意義であるという考えを、ボイドはアダムズと共有していた。また、「問題解決」というデューイの概念、「他者の役割取得」というミードの発想にもボイドは学んで、ボイド自身の「遊び」論を構築して実践した。それは、「遊び」がそれ自体として価値を有するというよりも、「社会的な規律訓練」と「社会的な調整」であるとい

う主張である (Boyd 1934, 1938)。ポイドは多様な民族の間で生まれ伝承されてきた「遊び」を重視する。それは「社会的な型となった人間性」、「典型的な生活経験」を凝縮したものであるからである。従って、遊ぶことはその社会の文化・歴史において必要な人間性を作り上げたり、それから逸脱した性質を修正したり改善したりすることにつながる。ここでは、ポイドにいたって「遊び」が療法化していく姿を見て取ることができる。ポイドに療法化への導きを与えたのは、シカゴ・プラグマティスト以外でポイドが論及するもう一人の研究者、一般意味論の創始者として知られるアルフレッド・コージブスキー (Alfred Korzybski, 1879-1950) であると考えられる。コージブスキーは有機体と環境との相互作用を媒介している神経系と言語の役割に着目し、神経系の硬直化が生じて、ある個人が自分の用いる言語に対する他者の反応よりも、自分の用いる言語の意味に固執すると、他者を含む環境との間に意味論的障害が生じると論じ、「健全さ」を保つ訓練を重視したからである。(ただし、コロナ禍でポイド思想の資料収集と分析は完了することができなかった。以下は暫定の結論である。)

以上から、想像上の状況で「問題解決」を行うことで人類の経験を子ども自ら追体験するものとしての教育 (アダムズ、デューイ、ミード) は、「協働」の理論 (ミード) へ、そして、「社会的な規律訓練」と「社会的な調整」の理論へと展開したというのが本研究の結論である。

引用文献

- Addams, Jane, [1909]1999, *Twenty Years at Hull-House*, Boston: Bedford/St. Martin's.
- Boyd, Neva Leona, [1934]1971, "Play-A Unique Discipline", Paul Simon, ed, *Play and Game Theory in Group Work: a Collection of Papers by Neva Leona Boyd*, Chicago: The Jane Addams Graduate School of Social Work at The University of Illinois at Chicago Circle, 35-44. (PGT)
- , [1938]1971, "Play as a means of Social Adjustment", PGT, 61-71.
- Deegan, Mary Jo, 1990, *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918*, New Brunswick: Transaction Books.
- , 1996, " 'Dear Love, Dear Love' Feminist Pragmatism and the Chicago Female World of Love and Ritual", *Gender and Society*, 10(5): 590-607.
- , 1999, "From the Perspectives of George Herbert Mead", George Herbert Mead, edited by Mary Jo Deegan, *Play, School, and Society*, New York: Peter Lang, xix-cxii.
- Dewey, John, [1899=1915]1976, *The School and Society*, Jo Ann Boydston (ed), *John Dewey*, Carbondale: Southern Illinois University Press, MW1, 1-109. (= 1998, 市村尚久訳『学校と社会 子どもとカリキュラム』講談社.)
- , [1902]1976, "The School as Social Centre", Jo Ann Boydston (ed), *John Dewey*, Carbondale: Southern Illinois University Press, MW2, 80-93.
- , [1916]1980, *Democracy and Education*, Jo Ann Boydston (ed), *John Dewey*, Carbondale: Southern Illinois University Press, MW9, 1-370. (= 1975, 松野安男訳『民主主義と教育』(上)(下), 岩波書店.)
- , [1934]1987, *Art as Experience*, Jo Ann Boydston (ed), *John Dewey*, Carbondale: Southern Illinois University Press, LW10, 1-366.
- Feffer, Andrew, 1993, *The Chicago Pragmatists and American Progressivism*, Ithaca: Cornell University Press.
- Mead, George Herbert, [1896]1968, "The Relation of Play to Education", John W. Petras, ed, *George Herbert Mead: Essays on his Social Philosophy*, New York: Teachers College Press, 27-34. (ESP) Originally published in the *University Record*, Chicago: University of Chicago Press, 1(8): 141-145.
- Mead, George Herbert, [1925]1964, "The Genesis of the Self and Social Control", Andrew J. Reck, ed, *Selected Writings: George Herbert Mead*, Chicago: The University of Chicago Press, 267-293. Originally published in the *International Journal of Ethics*, 35(3): 255-277.
- , [undated]1999, "The Function and Role of the Social Settlement", Mary Jo Deegan, edited and introduced, *George Herbert Mead, Play, School, and Society*, New York: Peter Lang, 64-75. Originated from an unpublished manuscript, The University of Chicago Library, George Herbert Mead Papers: 1855-1968, Box no. 13, Folder no. 11.
- Prochner, Larry, and Anna Kirova, 2017, "Kindergarten at the Dewey School, University of Chicago, 1898-1903", Helen Kay, Kristen Nawrotzki and Larry Prochner, eds, *Kindergarten Narratives on Froebelian Education: Transnational Investigations*, London: Bloomsbury Academic, 99-119.
- Rucker, Egbert Darnell, 1969, *The Chicago Pragmatists*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Seigfried, Charlene Haddock, 1996, *Pragmatism and Feminism: Reweaving the Social Fabric*, Chicago: The University of Chicago Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古屋 恵太	4. 巻 30
2. 論文標題 G・H・ミードの思想における遊び論の再検討 シカゴ・プラグマティズムの思想的系譜の見直し	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古屋 恵太	4. 巻 34
2. 論文標題 ジョン・デューイにおける「探究」と「誠実」に基づく学び 実践知を支える「真正性」を問う	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『学校教育研究』	6. 最初と最後の頁 8-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古屋恵太
2. 発表標題 「遊び」(play)と「劇化」(dramatization)から見たシカゴ・プラグマティズムの思想史 G・H・ミードとN・L・ボイドを中心に
3. 学会等名 教育思想史学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古屋 恵太
2. 発表標題 J. デューイとJ. アダムズにおける「劇化」の教育思想
3. 学会等名 日本学校教育学会第33回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田中智志編著、古屋恵太、佐藤隆之、松下良平、木下慎、加賀裕郎、井上環、西本健吾、生澤繁樹、藤井千春、高柳充利著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 348
3. 書名 教育哲学のデューイ 連関する二つの経験	

1. 著者名 ジョン・デューイ著、古屋恵太訳者代表	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 384
3. 書名 論理学理論の研究ほか、デモクラシー／プラグマティズム論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------